街路樹とあかりが美しいけやき通り

高樹のぶ子さん
1946年山口県生まれ。東京女子大学短期大学部を卒業後、出版社に勤務。80年「その細き道」で作家デビュー。84年「光抱く友よ」で第90回芥川賞、95年「水鏡」で第34回女流文学賞、99年「透光の樹」第35回谷崎潤一郎賞を受賞する。2002年からは芥川賞選考委員を務める。

「緑が街灯に照らされる、あの風景って大好きなんです。心がとても安らぎます」と、作家・高樹のぶ子さんは語る。けやき通りや浄水通り周辺がお気に入りという高樹さんは、街路樹や家々の庭先から覗く緑や花々のある景観の大切さを話してくれた。「私たちは、人々が行き交う公共の道の一角に家を建て住んでいます。だから、自分の住んでいる家の中だけでなく、道路に接している部分の景観にも責任があると思うんです。マンションのエントランスに緑が植えられているとそれだけでホッとしますし、季節ごとに花を覗かせる家を見ると住人の方の心の豊かさを感じます。道に面した側の景観って、その前を通る人と住人との言葉のないコミュニケーションの場のような気がします」。

仕事がら東京や海外へ出かけることが多い高樹さんですが、拠点は変わらず福岡に置き、すでに30年近くが過ぎた。「住み良いまちですから、人も集まってきますよね。人口の集中は文化にとってはある程度必要です。でも、だからといって東京になってはつまらない。都市と自然を共存させながら、住人たちがふっと心休まるまちになってほしいと願っています。街灯や緑、道沿いの家並み…そんな小さなところに気を遣った、住み心地のいい福岡であってほしいですね」。

まちの景観を築いていくのはそこに住む人々なのだと、高樹さんの言葉から実感した。家々が道路に面して緑や花々を飾る、そんな美しい景観が福岡にもっと増えていってほしい。

「まちをつくるのも動かすのも人の力。住人たちの心がまちに映ります」
高樹のぶ子さん